

第44回 福岡県地方史研究協議大会報告

福岡県の中世山城

主催 福岡県教育委員会
共催 福岡県地方史研究連絡協議会（福史連）
期日 平成22年6月26日（土）
会場 福岡県立図書館レクチャールーム（本館地下1階）
日程

13:00 開 会

◆館長あいさつ

◆福史連会長あいさつ

13:10 講 演（85分）

「福岡県城郭研究の現状と課題」

講 師 中村 修身 氏

14:35 休 憩（15分）

14:50 講 演（85分）

「福岡県の城郭と年代観

—近年の城郭研究を踏まえて—

講 師 中西 義昌 氏

16:15 質疑・応答

16:30 閉 会

福岡県立図書館

講師プロフィール

◎ 中村 修身 氏

現 職	北部九州中近世城郭研究会会長 長崎街道小倉城下町の会副会長
専 門	日本史(古代・中世)
研究テーマ	中世城郭の諸問題 縄文時代の生産と流通 弥生時代の石器生産と農耕
主な著作	『図説北九州の歴史』(監修) (福岡県の歴史シリーズ) 郷土出版社 2008年 『図説田川・京築の歴史』(編集) (〃) 〃 2006年 『福岡県の城郭』 福岡県の城郭刊行会編 銀山書房 2009年 「豊前国の中世城郭について—在地勢力の動向」(『史学論叢』 36号 2006年) 「福岡県若宮盆地の中世城郭調査」(『日本考古学』 12号 2001年)

◎ 中西 義昌 氏

現 職	博士(比較社会文化) 別府大学非常勤講師 城館史料学会・城郭談話会会員 竹田市役所職員
専 門	城館史料学・建築史学
研究テーマ	城郭の縄張りからみる戦国・織豊期の領主権力と地域の様相 ・北部九州の戦国期城郭と大友氏・国衆 ・豊後岡城と岡藩中川氏
主な著作	『歴史史料としての戦国期城郭』(共著)花書院 2001年 「戦国期城郭の縄張り構造と大友氏領国」(『戦国大名大友氏と豊後府内』 高志書院 2008年)

大会の様子（写真）

◆中村修身氏による講演の様子◆



◆中西義昌氏による講演の様子◆



【講演 1】

「福岡県の城郭研究の現状と課題」

北部九州中近世城郭研究会会長 中村 修身

城郭(お城)は古くから多くの人々がいろいろな思いをもっていて、関心も高い。そのような城郭の実態を知りたいと、福岡県の城郭の調査、研究が盛んに行われるようになった。また、昨年には『福岡県の城郭』も銀山書房から発刊され話題を集めている。

中世城郭の実態把握のために遺物、縄張り図、分布、建物など多岐にわたる分野が調査対象とされている。近年特出すべきことは、多くの人々が携わり、現地を訪れ城郭の配置を縄張り図としてまとめる分野の進展である。この四〇年を振り返ると、度重なる点検により縄張り図の精度は格段に上がっている。縄張り図は郭、畝状堅堀群、土塁、堀切、切岸、石垣さらに虎口、土橋など城郭の配置を図化したものであり、これによって規模や構造をつかむことができる。

現在、城郭の規模はほぼ6種に大別できる。すなわち、小規模な城郭、中規模な城郭、大規模な城郭、巨大城郭、小規模な館(宅所)、そして筑前、筑後、豊前では確認されていないが大規模な館(大分県上野館、山口県大内館)である。

小規模な館は、現地において山城と把握されていることが多い。しかし、縄張りから判断すると館であるし、文書資料には宅所、里城と記されている。さらに、在地性を最も象徴している遺跡と考えるので、ここで取り上げた。

これら城郭や館は、中世末期(戦国時代)の土地を生産の基盤とした在地勢力と生産の基盤を土地以外に置いた勢力(戦国大名、常備軍、商人、工人など)との激突の象徴であり、その再編消長は戦国史を物語っている。

まず激突の様子を見てみよう。(以下は巨大な臨時的城郭の例である。)

福岡市・新宮町にまたがる立花城は豊後大友勢・戸次道雪が守り、筑前国の要の城としての役割を持っている。永禄年間の大友勢と毛利勢の主戦場として知られていた。木島孝之氏の調査によって巨大な城郭であることが明らかにされた。

また、藤野正人氏によって、立花城に隣接した三日月山と長谷を西に越えた城の越山を中心に、それぞれ尾根筋を中心に約 2000 メートルを越える極めて巨大な二つの城郭が確認された。これらは、立花城攻めに際して毛利勢によって臨時的に築城された城砦群であることが、明らかにされつつある。両城の距離は約 500 メートルである。(なお、ここでは在地性城郭と臨時的城郭に焦点を当てたので、毛利勢、大友勢の攻守の位置関係は極めて単純化して述べている。あしからず。)

久留米市杉ノ城は、筑後国の最大勢力高良山に接して造られた大規模城郭である。永禄年間の立花陣に際して、大友宗麟が杉ノ城を本陣としたことは良く知られている。高良山勢の拠点城郭に大友宗麟が入城したのか、それとも大友宗麟の本陣として新たに築かれたのかの議論は残るが、立花城(戸次道雪)支援の大友方本陣として臨時的に使用された。

次に小規模な臨時的城郭の例を見ておこう。

築上町通楽城(または茅切城。『黒田家譜』は神楽城と誤記)などが明らかとなっている。城井鎮房の本庄城(築上町)を攻める黒田勢が造った通楽城(向城)は、本庄城(城井方詰城)から尾根筋約800メートルに造られた小規模な臨時的城郭である。一方、本庄城は領地防衛のために城井氏によって造られた城郭である。

同様な例と思われる城郭に久留米市(仮)草野城(詰城)と東側尾根筋約 100 メートルの位置にある中ノ城(向城)、北九州市竹ノ尾城(永禄年間麻生鎮里の詰城)の北側、割子川を挟んだ約 300 メートルにある市瀬城(向城)などがある。

臨時的に造られた小規模城郭として次のような例もある。天正十四年秀吉政権の九州侵攻に際して秋月勢によって遠賀川下領域に造られた剣岳城(鞍手町)、古賀城(水巻町)、浅川城(北九州市)は、城攻めのために造られた城郭ではないが、まさに臨時的に造られた小規模城郭である。

二ないし三の城郭が近接して位置する例は、分布調査で幾つも確認されている。この様な場合、それらを使用時期差とする見解が多いが、現実的には相対する勢力の軍事施設と捉えることもできる。

今回は立花城に対する三日月山城砦群、本庄城に対する茅切城のような城攻めのための臨時的築郭に焦点を当てて述べてきた。こうして見てくると、立花城や本庄城は在地支配および在地防衛のための城郭であることが分かる。

在地を守る城郭は、宅所(小規模な館)と詰城が組合せとなっているもの(小田村備前の戸畑宅所と中ノ島城、城井氏の大平城と溝口館など)や「村の城」(珂川町中原の大機庵の城、宮若町坂元城、北九州市楽丸城)などである。小規模城郭ないしは中規模城郭の大半はこれに属すと考えられる。

藤木久志氏が明らかにした「村の城」も在地勢力の城郭である。村に近接した小規模な城郭の場合、その村には土塁・堀で防備された館は見られない、つまり卓越した在地領主がいないことが特長である。

在地勢力の小規模城郭ないしは中規模城郭をどのように統括していったかという鍵は、守護大名によって管理者「城督」が任命されている大規模城郭が握っていると思われる。

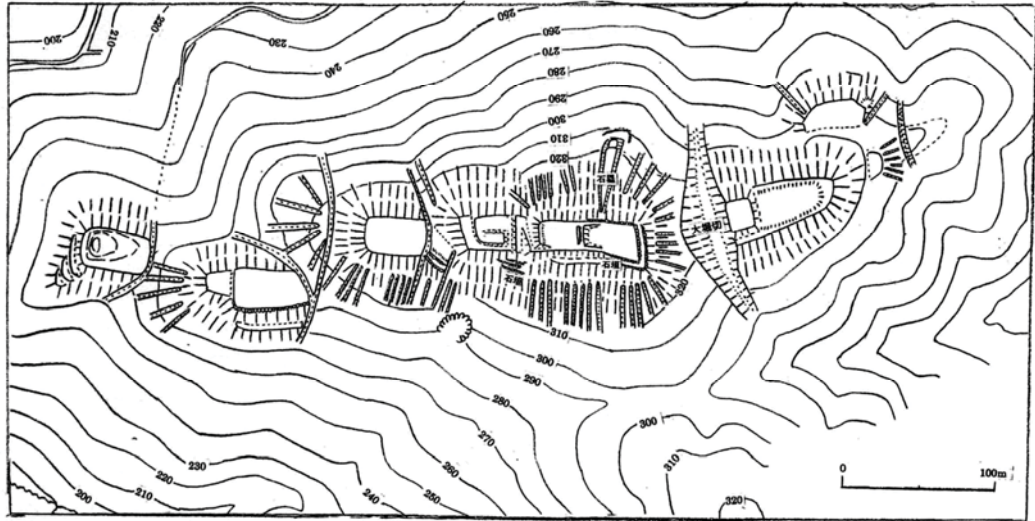
北九州市八幡西区花尾城は一般に筑前麻生氏の居城と認識されている。『正任記』では麻生家延の家城として帆柱城が記され、家延は、大内家に対して、麻生家の家督は諦めるので花尾城を今までどおり自分に預けて欲しい、と嘆願している。これは花尾城が筑前国守護大内家直轄の城郭であり、遠賀郡・矩矩郡の軍事指揮権さらには行政権を花尾城督が持っていたからである。そのことは、前大宮司到津公澄による訴状(到津庄内の築城反対)に対する大内家奉行・貫武助らの天文七年十月六日付け回答書状から、到津庄内に築城を目論んだのは「花尾城督」である、と読み取れることから明らかである。

天正十五年前後から巨大城郭が出現する。

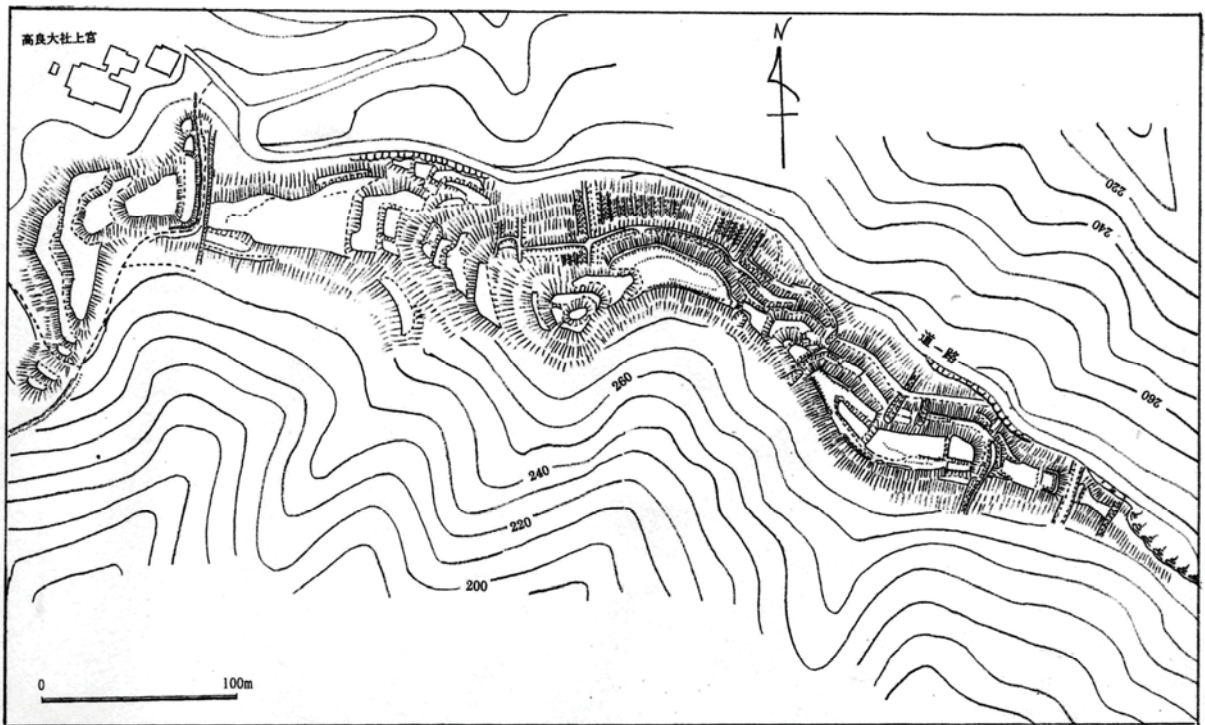
在地系の巨大城郭として筑前国、豊前国の最大の領主秋月種実の隠居城と言われている益富城をみることにする。益富城は黒田氏支配下の後藤又兵衛改築部分が良く知られているが、最近、木島孝之氏によって、巨大な城郭の全容が明らかにされた。この巨大城郭は、馬ヶ岳城や松山城のような外郭土塁は見られず、各尾根筋に幾つもの郭群が形成されている点に特長がある。この形態は、天正十年代の大名秋月氏と国人領主の関係(家臣化)の度合いの現れと見ることができる。

馬ヶ岳城は豊前国支配の上で極めて重要な大規模城郭であったが、天正十四年、秀吉九州下向にともない、外郭土塁・横堀などで増設改修された巨大な城郭にかえられた。形態の巨大化は、九州にまったく地縁のない秀吉政権の戦地経営の戦略基盤としての機能と、常備軍化が進んでいた秀吉政権の軍編成とが考慮された結果と思われる。この特長は元禄慶長の役に朝鮮国内に造った倭城の原型ともなっている。

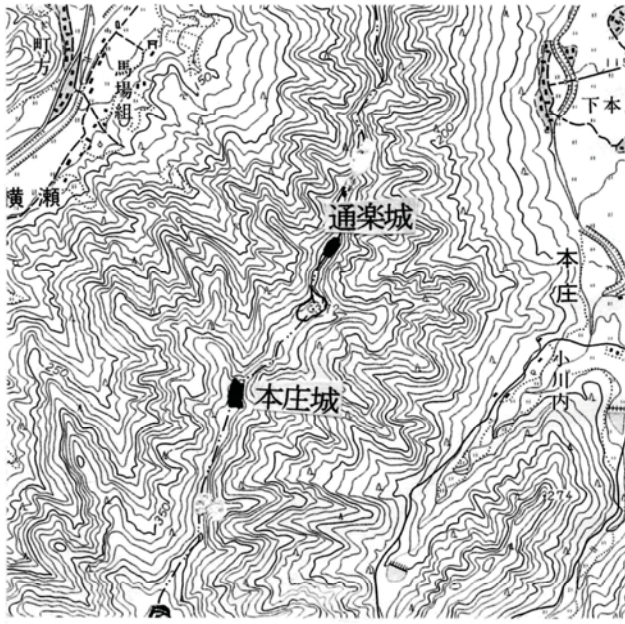
近世の城郭は次第に、城内に地方(藩)の政治経済および文化の中心として機能を持つ厩、勘定方、普請方などの施設、さらに、常備軍から改変された家臣団や商人、工人、など農民以外の居住地が設けられ、巨大城郭となる。近世城郭に見られるこの現象は、在地に数多く造られ在地勢力の軍事的基盤となっていた小規模城郭や中規模城郭が姿を完全に消すことと、深く連動している。



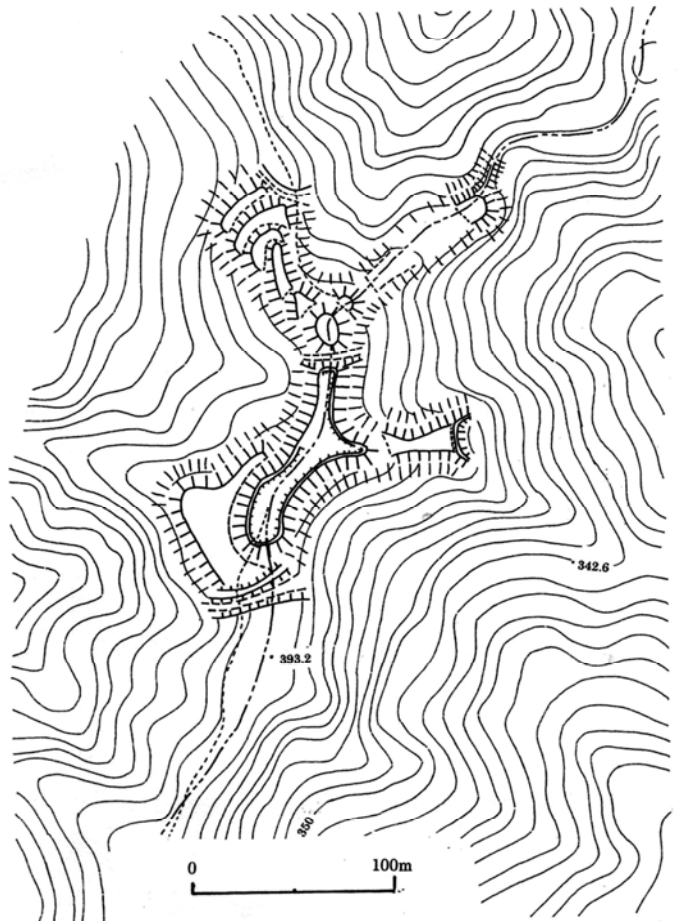
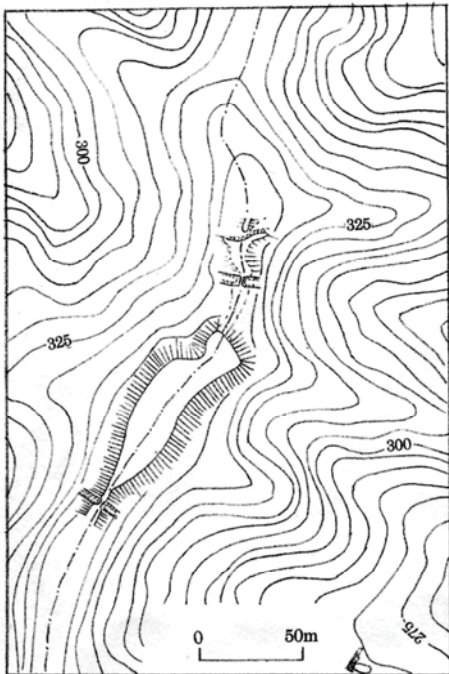
北九州市 花尾城 (中村修身作成)

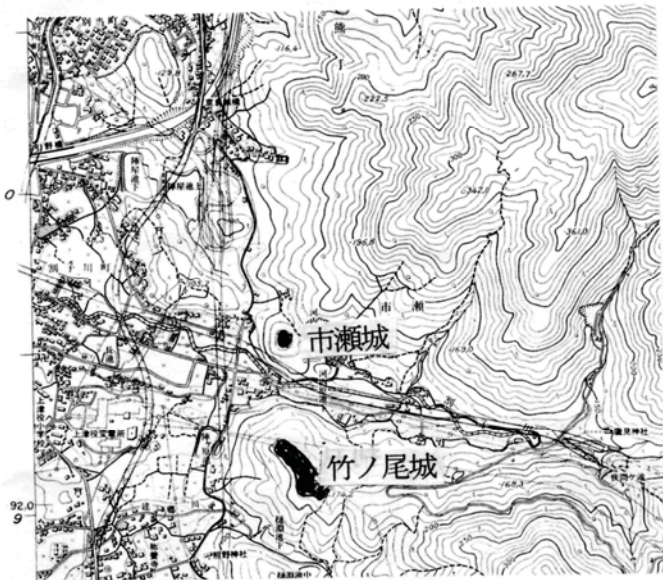


久留米市 杉ノ城 (中村修身作成)

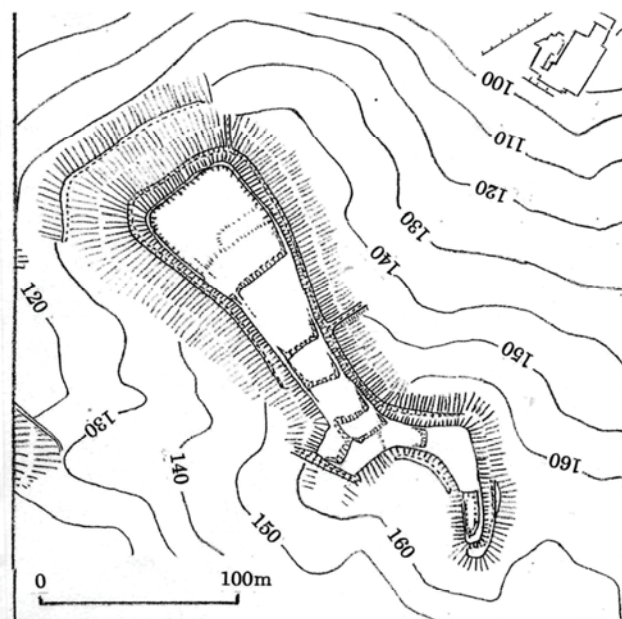
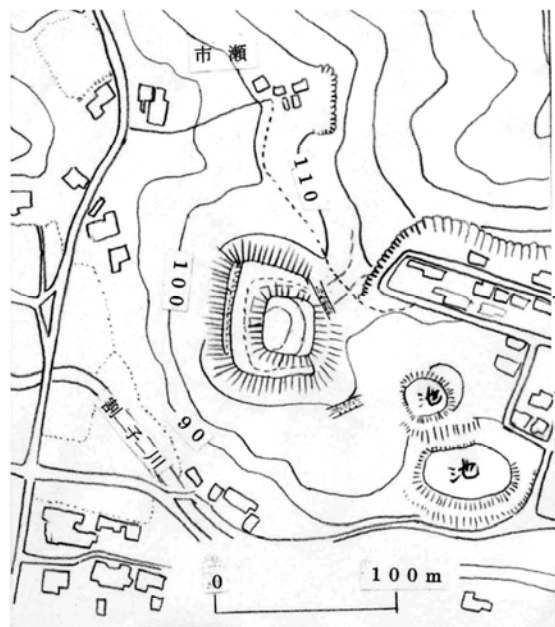


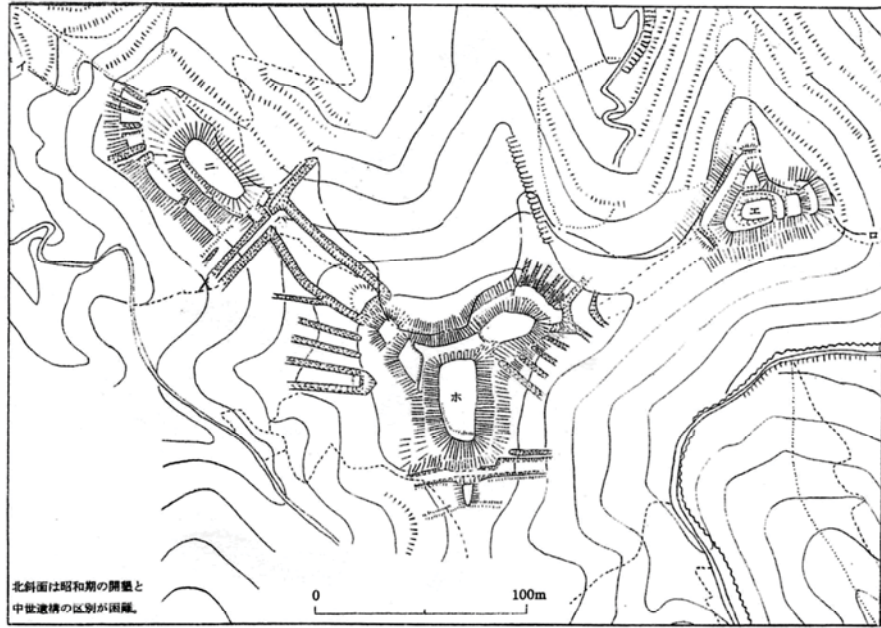
左 位置関係図
 下左 築上町通楽城 (中村修身作成)
 下右 築城町本庄城 (中村修身作成)



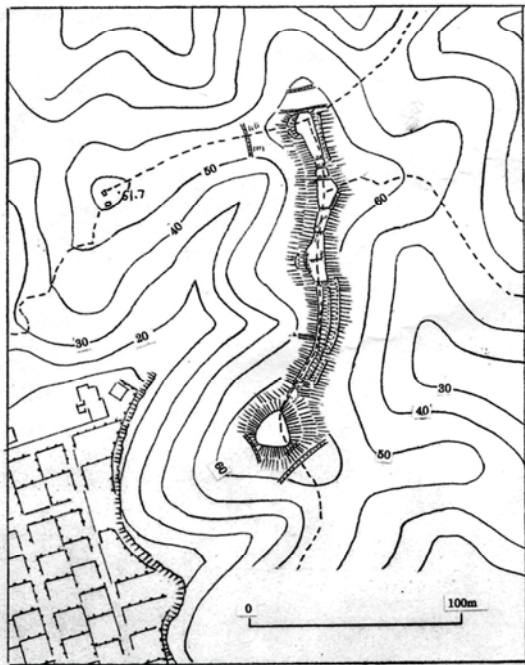


左 位置関係図
 下左 北九州市 市瀬城 (中村修身作成)
 下右 北九州市 竹ノ尾城 (中村修身作成)

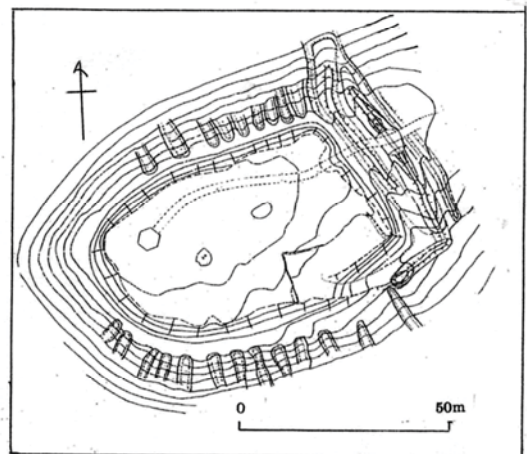




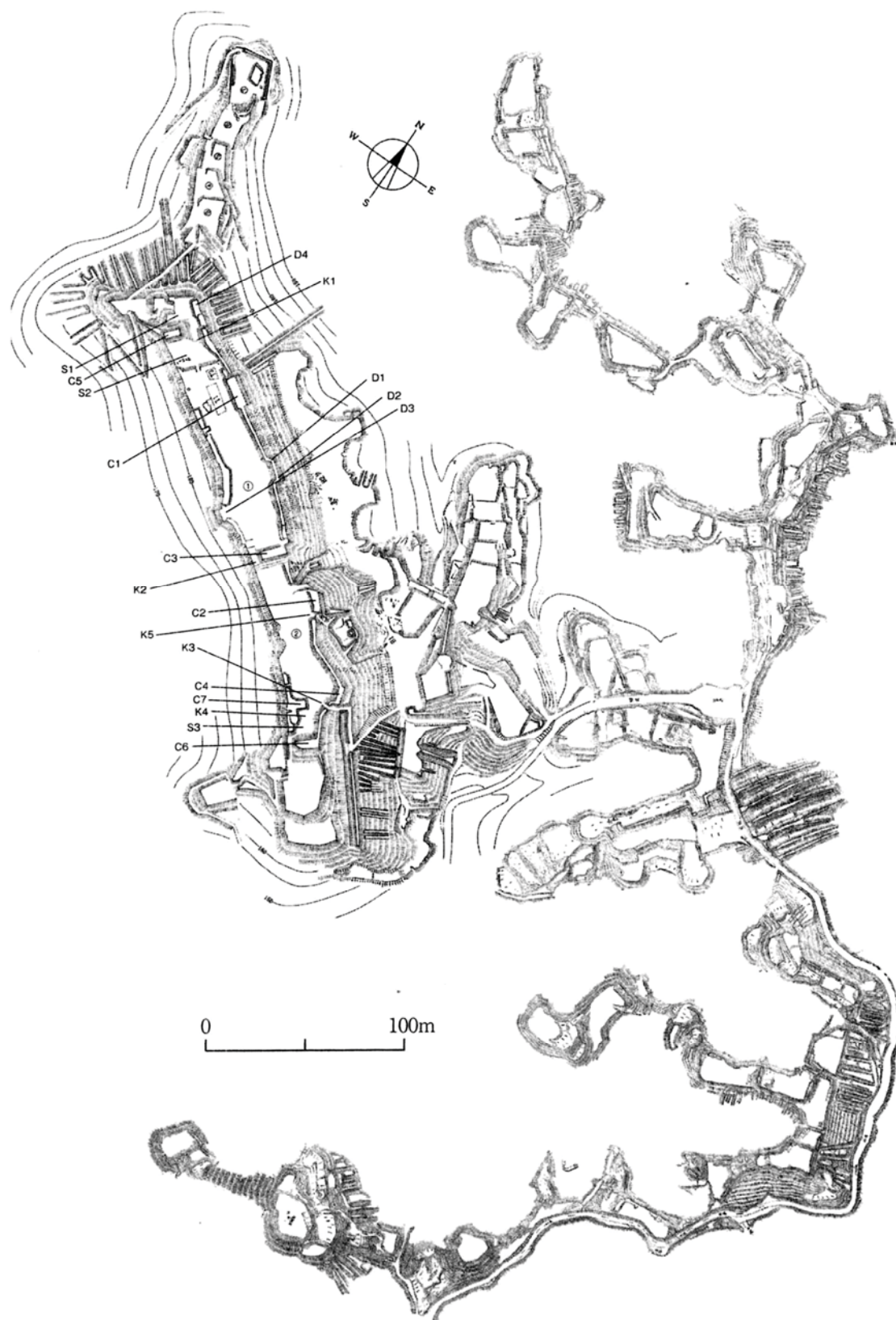
久留米市 西側 (仮) 草野城 東側 中ノ城 (中村修身作成)



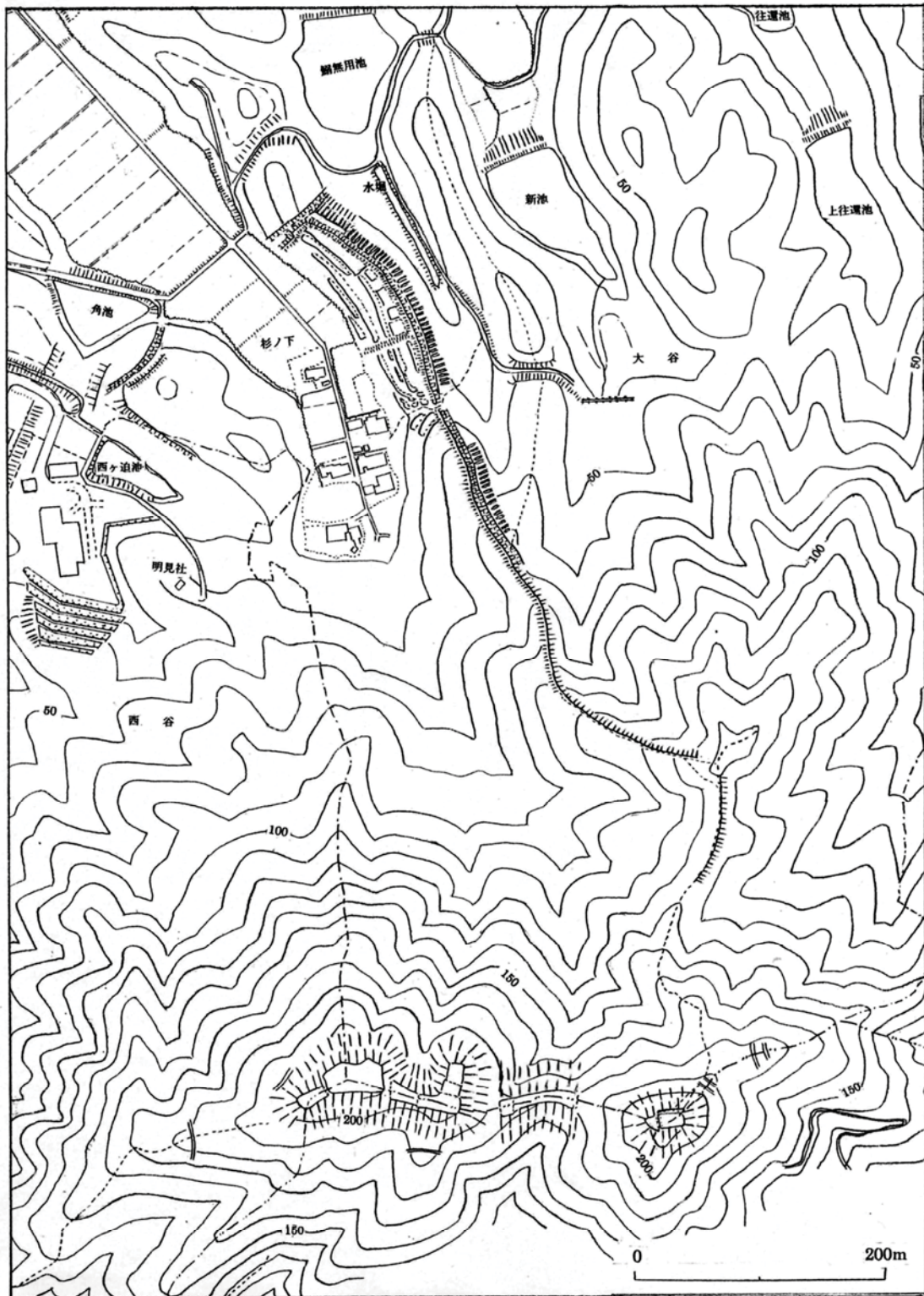
北九州市 浅川城 (中村修身作成)



鞍手町剣岳城 (中村修身作成)



益富城図 (木島孝之作成)



行橋市 馬ヶ岳城 (中村修身作成)

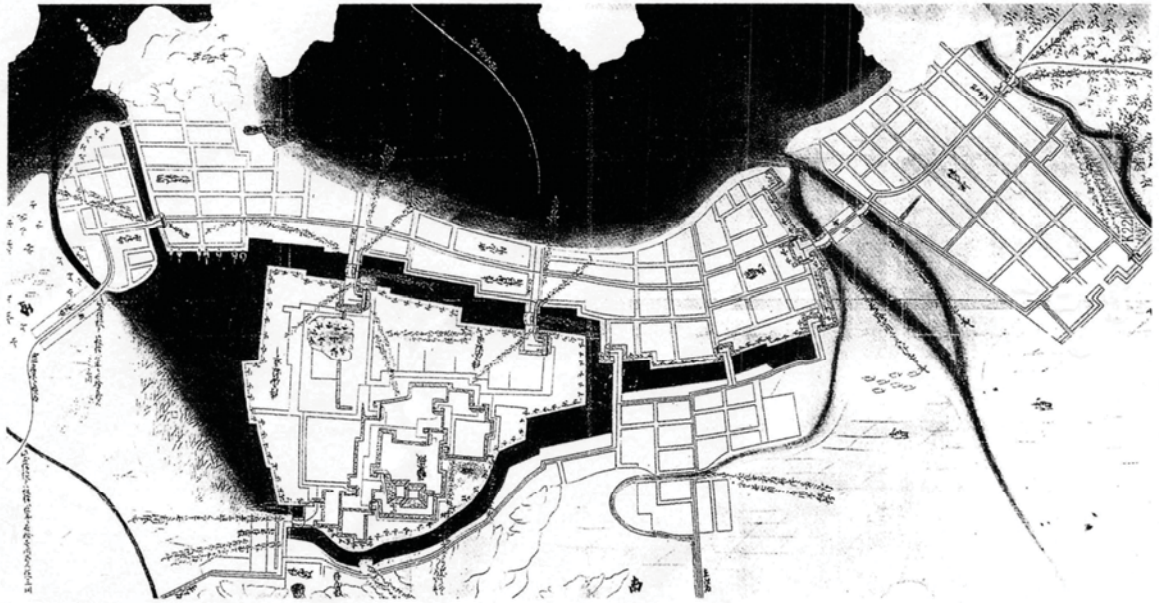
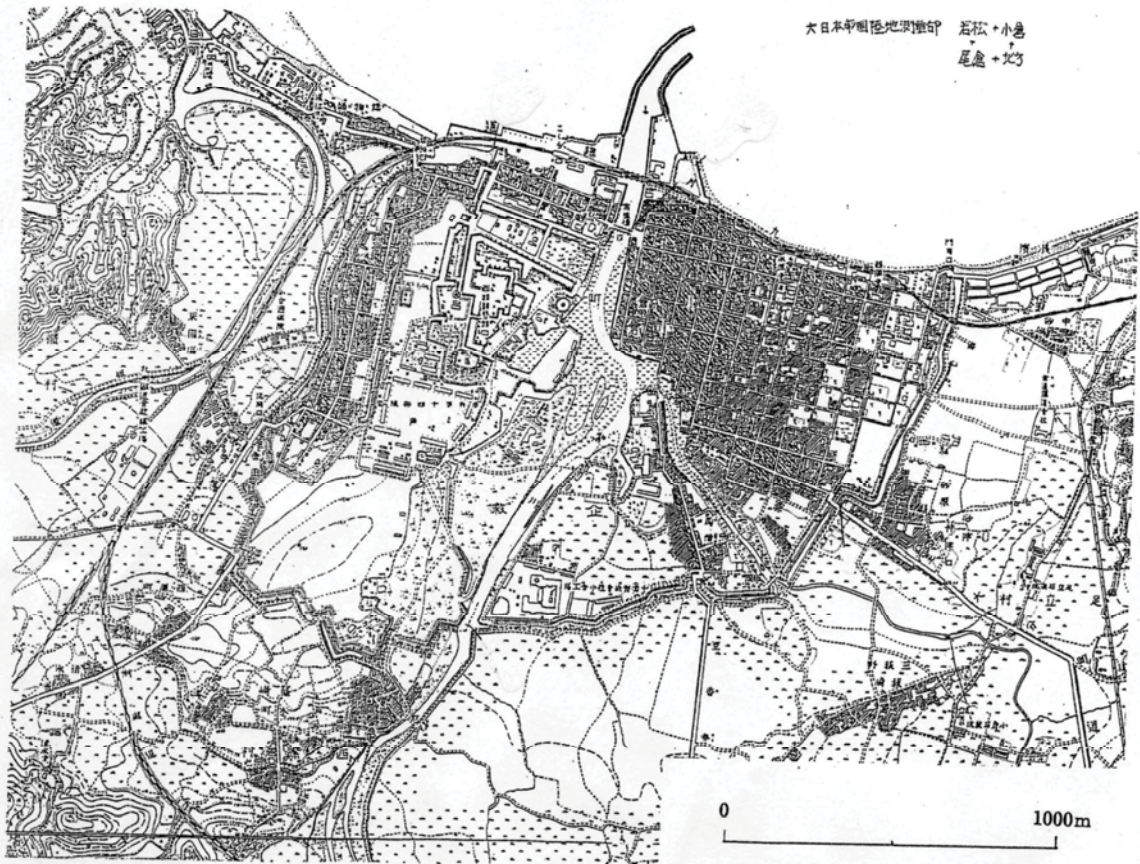


図1-3 「新編通志」御問絵図 福岡市博物館蔵

福岡城普請御問絵図



大日本帝國陸地測量所 尾松+小島
尾島+北巧

0 1000m

小倉城

【講演2】

福岡県の城郭と年代観—近年の城郭研究を踏まえて—

城郭談話会会員 中西 義昌

福岡県の城郭から中・近世城郭の年代観を考える。

福岡県は、かつての筑前国・筑後国と下毛郡・宇佐郡を除く豊前国にあたる。その範囲は北部九州の大部分を占める。戦国期には大名領国が形成されなかったが、境目地域として大小様々な国衆が割拠し多くの城郭が築かれた。

考古学の分野において福岡県は全国屈指といえるほど研究の盛んな地域であるが、こと城跡遺跡となると、散発的な調査事業に留まり国庫補助の悉皆調査事業すら未だ実施されていない。今回上梓された『福岡県の城郭』は、地元研究者の手で進めてきた城郭調査の成果をまとめた労作である。

北部九州における中・近世城郭の様相を概観すると、天正後期に秋月氏や筑紫氏ら有力国衆が技巧的な城郭を普請し、複雑な防塁型ラインで防禦する在地系の縄張り技術を発達させた。同時期に本州では、東海・畿内の戦乱から台頭した織田氏、豊臣氏（豊臣政権）が統一戦争を進めながら、後に近世城郭につながる織豊系縄張り技術を発達させていた。

そうした状況を踏まえると、1585-87年の秋月氏と豊臣政権との戦いは、縄張り技術の「文化圏の衝突」とも言える。秋月氏は豊筑地域に在地諸勢力を糾合した大城郭を築き、豊臣政権に激しく抗戦した。この戦いは秋月氏の降伏で終わり、九州国分けにより在地系城郭（在地系の縄張り技術を用いた城郭）は断絶し、立花山城大改修を嚆矢に織豊系城郭（織豊系縄張り技術を用いた城郭）が拠点城郭に導入された。

本報告では、今日の城郭研究で盛んな城館史料学の視点を紹介すると共に、北部九州の地域性を踏まえつつ『福岡県の城郭』収録の城郭遺跡をもとに、16世紀の城郭の変遷について考えたい。今日、16世紀の城郭の変遷過程については様々な分野の関心を集めているが、1585-87年に起きた在地系縄張り技術から豊臣政権の織豊系縄張り技術への転換は、全国の戦国・織豊期の城郭の年代観を考える上で大きな指標となる。「福岡県の城郭」を中世から近世への歴史的な変化を今日に伝える「物的」史料として、その史料価値を示す。

城郭研究の方法論—縄張り研究から城館史料学へ—

まず、城郭研究の方法論について概説する。1980年代以降、城郭研究では縄張り研究と呼ばれる分野が盛んである。城郭遺跡の現地調査から縄張り（曲輪・空堀・土塁・石垣等の土木物や建築物で構成される城郭のかたち）の構造に着目し、縄張りとの関係で城郭遺構を有機的に捉えることで、これを史料として活用する点を特徴とする。

従来の城郭研究では、文献史料による城主や普請、城下法制の読解や、建造物の復元的考察、発掘調査や出土遺物の編年作業に留まり、遺跡から歴史を読み解く視点はみられなかった。縄張り研究はそのような状況を克服し、諸資料をもとに遺構で検証する史料学（城館史料学）を指向することで、城郭研究を学術研究のテーブルに乗せる役割を果たした。

近年では、通説的な戦国・近世の歴史像について、城郭遺構という「物的」史料から再考を図ると共に、文献・考古資料、絵図等の諸資料により状況証拠を固めた上で、遺構で検証するという、本来あるべき学際的研究が実践されつつある。

ところで、縄張り研究では地表面観察で現況遺構を把握することから、現存する城郭遺構は最終段階のものである、という認識に立つ。他の城郭研究が、築城年代の解明と当初の姿に強い関心を

持つのとは対称的である。また、16世紀の社会を概観すると、元和年間の城郭統制が敷かれるまでは、経済力の進展により増大した余剰生産力の多くが築城に費やされたことが明らかである。その間、織豊系縄張り技術に顕著なように、単純から複雑、そして整理（形式化）へと展開したものと考えられる。

これらの認識に立って、縄張り研究では、現存する城郭遺構が新しい時代の改修を受けていないかを慎重に検証し、史料解釈を行う。

福岡県の城郭と年代観—天正後期豊臣政権の九州征伐前夜の戦乱と城郭—

福岡県の城郭から年代観を考える場合には、秋月氏や筑紫氏らが展開した在地系縄張り技術と、九州国分け後に豊臣大名により持ち込まれた織豊系縄張り技術は、全く異なった技術体系であったことが重要である。織豊系縄張り技術（横矢掛りなどを配した直線的な塁線や横堀、柵形虎口を持つ等）か、そうでない在地系城郭か、が年代比定の指標になる。

在地系縄張り技術の発達と廃絶、織豊系縄張り技術が席卷するという、北部九州で起きた城郭技術の劇的な変化については、柑子嶽城（福岡市西区）と益富城（嘉麻市）、立花山城（福岡市東区・新宮町）が指標となる。

まず、柑子嶽城は、1579（天正7）年に原田氏の攻勢に落城した時期を最終段階とする。一方、益富城は、1585（天正13）年に秋月種実が子の種長に家督と古処山城を譲り北進政策の最前線として築いた城郭である。1587（天正15）年に豊臣政権の進攻により落城する。主郭部は後に黒田氏により織豊系の縄張り技術で改修されたが、外郭部には秋月氏の最終段階の縄張り技術が良好に残る。そして、立花山城は、永禄期の大友氏・毛利氏の戦闘を経て大友氏の拠点となり、天正後期には立花氏が在地諸勢力を囲い込んだ広大な城域を構えた。1587年以降は豊臣政権の鎮西の抑えとして小早川隆景が入部し、主要部は織豊系縄張り技術で改修された。

また、立花山城は永禄期と天正後期に攻城戦の舞台となった。その際の陣城である、三日月陣（福岡市東区/永禄期に毛利方高橋鑑種が構えたとする）と、高鳥居城（須恵町/1586年に秋月種実が立花山城攻めに改修した付城）も年代比定の指標となる。

これらの指標となる城郭遺跡から、次のことが読み取れる。

○1586年段階まで発達してきた在地系城郭は土塁・横堀・畝状空堀群による複雑な防塁型ラインで城域を囲い込む縄張りが主流。塁線は地形に沿ったもの。虎口は、益富城や勝尾城など数例を除いて、大半は作事による出入り口を設定するに留まる。

○1587年以降は、豊臣大名により織豊系縄張り技術（石垣などで直線的に仕上げた塁線で虎口付近に横矢掛りを配し、L字状の石塁による連続柵形虎口を用いる）の城郭が築かれた。小早川隆景の立花山城や豊前国の黒田領の支城・陣城などが確認できる。

○畝状空堀群・土塁・横堀を複雑に組合せた防塁型ラインは、秋月氏勢力圏を中心に分布する。益富城の築城・廃城時期から、これらの縄張り技術が天正十年代に急速に発達したことがわかる。これを指標とすると、秋月氏と勢力を二分した筑紫氏も、同時期に土塁・横堀を組合せた防塁型ラインを急速に発達させたとは推察される。

○天正中期に反大友方有力国衆に攻略された柑子嶽城の縄張りは、連郭式かつ部分的な畝状空堀群の使用に留まる。この他、鷲ヶ嶽城（那珂川町）の事例などから天正十年代以前は、防塁型ラインはまだ発達していないものと推察される。

○永禄期の立花山城攻城戦では、文献史料から毛利・大友氏は多くの陣所を築いたとされるが、明確な遺構はみられない。三日月陣所も削平の弱い曲輪が並ぶ程度である。一方、1586年に攻めた秋

月氏の付城、高鳥居城になると益富城のような防塁型ラインがみられる。15年の間に劇的に、普請に係る土木量が増えたことがわかる。

要点を整理すると、北部九州では、永禄期の毛利・大友氏間の戦争では、城郭の普請では相対的に土木量が少なかったものとみられる。そして1578年以降の大友方・反大友方の抗争期に城郭への普請と縄張り技術の発達が進み、天正十年代、1580年代半ばの地域紛争の激化から豊臣政権との対決姿勢を深める間に、秋月氏や筑紫氏ら有力国衆が城郭の普請に多くの土木量を費やすようになり、複雑で大規模な防塁型ラインを創出したことが見て取れる。

この北部九州の年代観を全国と比べると、織豊系縄張り技術の出現は20年ほど遅れているような印象を受ける。このズレについては、従来は本州からの伝播論で語られてきた。しかし、この年代観を軸に畿内・東海の事例を読み直すと、在地勢力の発達させた複雑かつ技巧的な縄張り技術は、少しズレたとして元亀・天正期の20年間に全国各地で劇的に展開した可能性が考えられる。

これらの見込みの証明は今後の課題になるが、『福岡県の城郭』によってみえてきたことで、これらの事例を全国的な議論のテーブルに乗せる研究が、今後進むことが期待される。

※参考文献

木島孝之「中・近世城郭の調査方法-特に山城について-

福岡県管内市町村文化財行政担当者研修会レジュメ、1999年

木島孝之「織豊系城郭における虎口プラン変遷案作成の試み」(『愛城研報告』第5号)2000年

木島孝之「筑前立花山城跡が語る朝鮮出兵の道程」(『城館史料学』創刊号)2003年

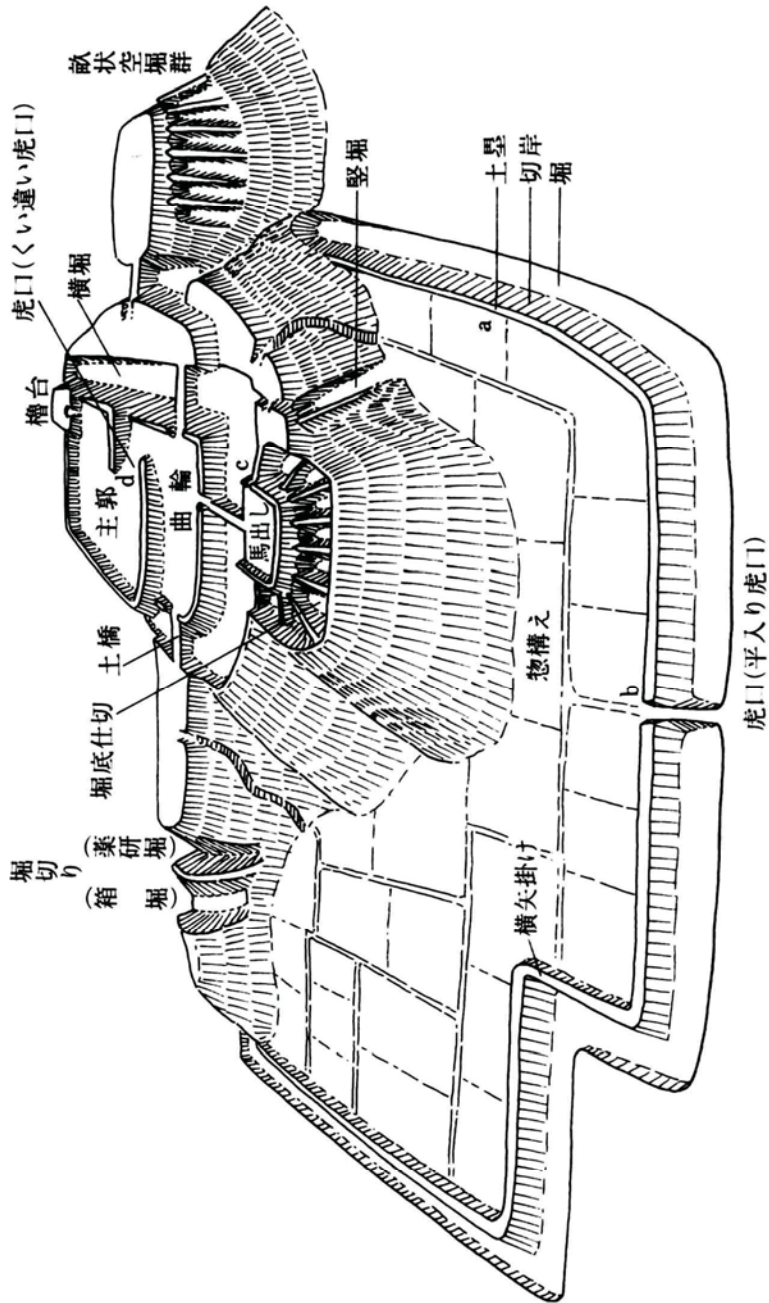
木島孝之・中西義昌「天正中・後期の北部九州における城郭の様相」

『鳥栖の町づくりと歴史・文化講座』鳥栖市教育委員会、1998年

千田嘉博「織豊系城郭の構造」(『史林』第70号第2巻)1987年

中西義昌・岡寺良『歴史史料としての戦国期城郭』花書院、2001年

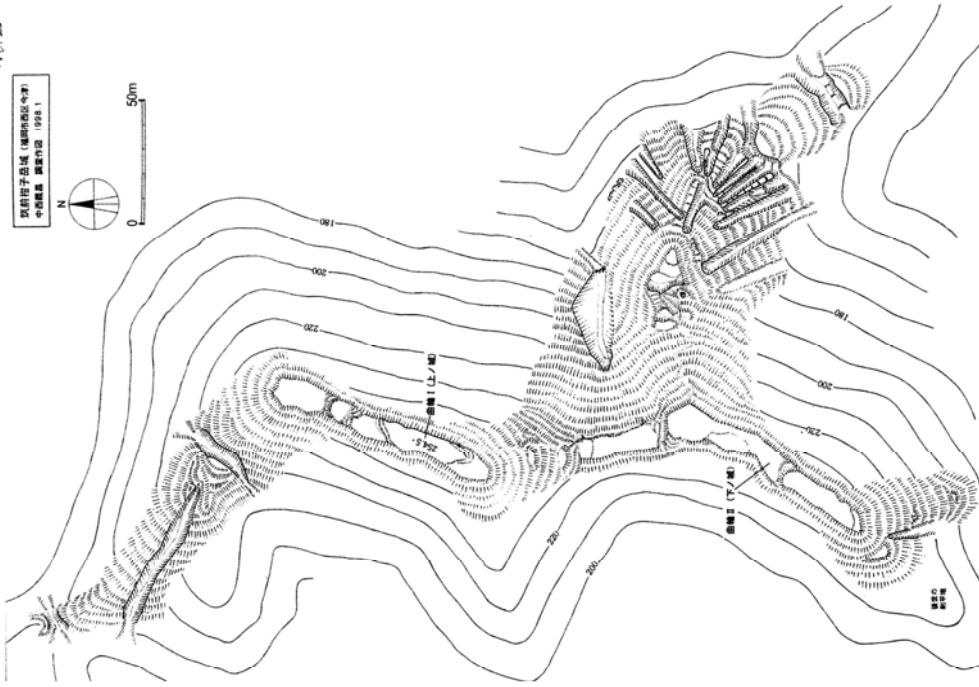
福岡の城郭刊行会編『福岡県の城郭』銀山書房、2009年



城郭の縄張りと言語

图 2.

筑前国子岳城 (福岡県筑前国今津)
中国盛唐 藤原行成 1081.1



柑子岳城图 (中西義昌作成)

图 2. 柑子城域 (福岡市西区)



岩屋城图 (岡寺良作成)

图 1. 岩屋城 (大宰府市)

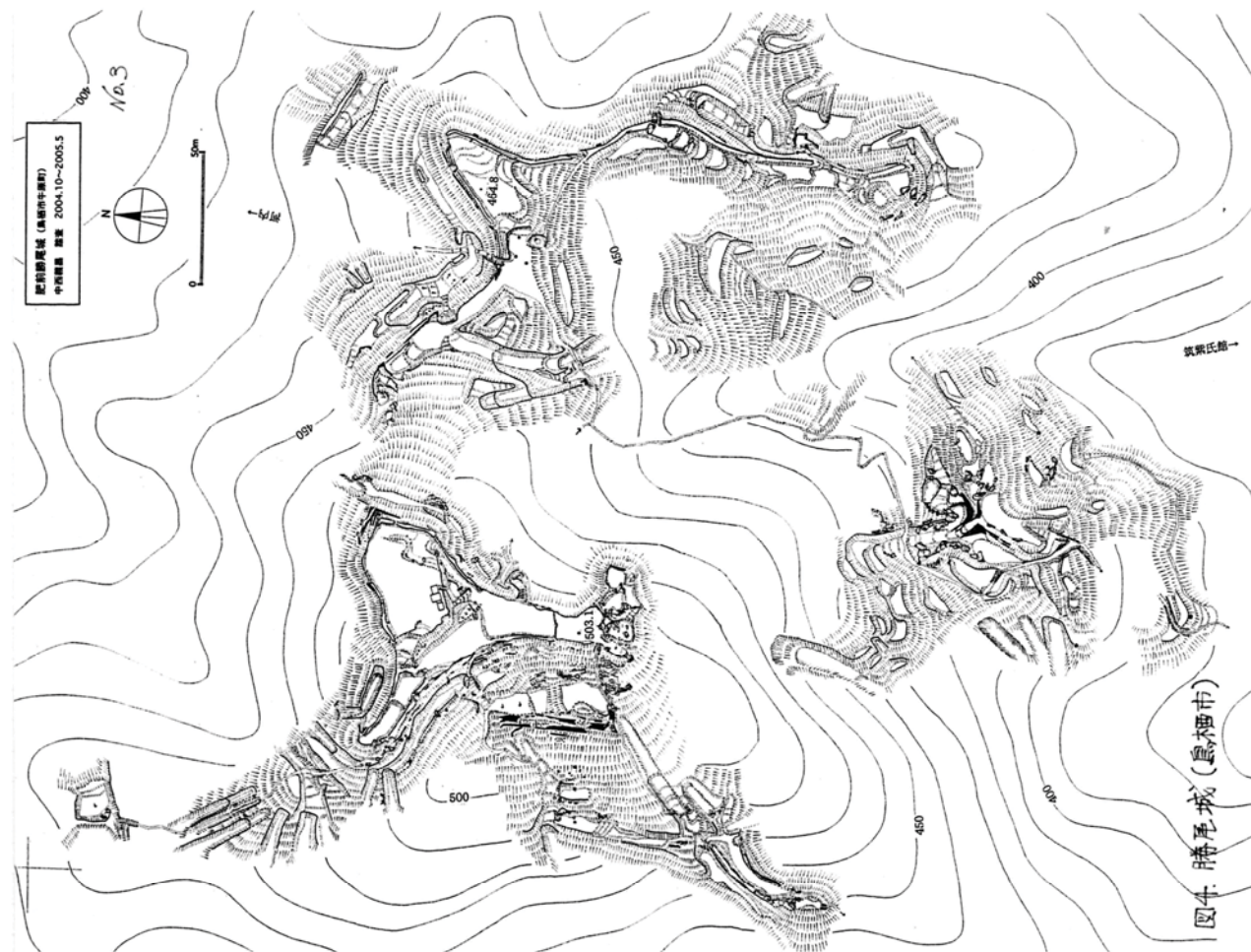
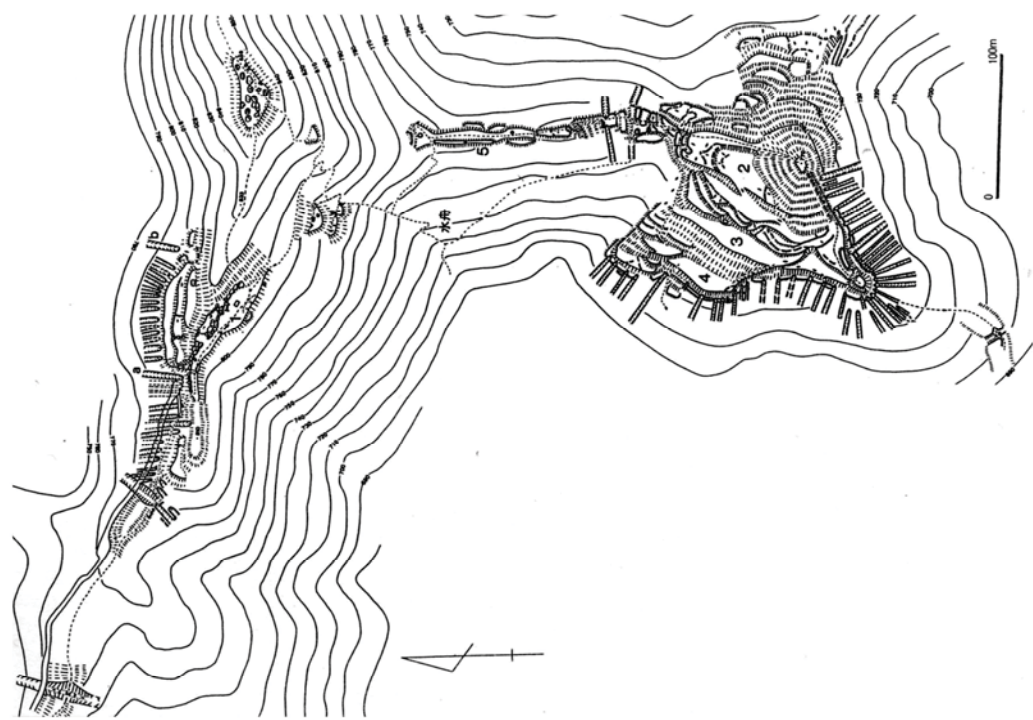


图4. 野尾城(鳥居市)



古処山城图 (岡寺良作成)

图3. 古処山城(朝倉市)



图5 立花山城(福岡市東区・新宮町)

No. 5

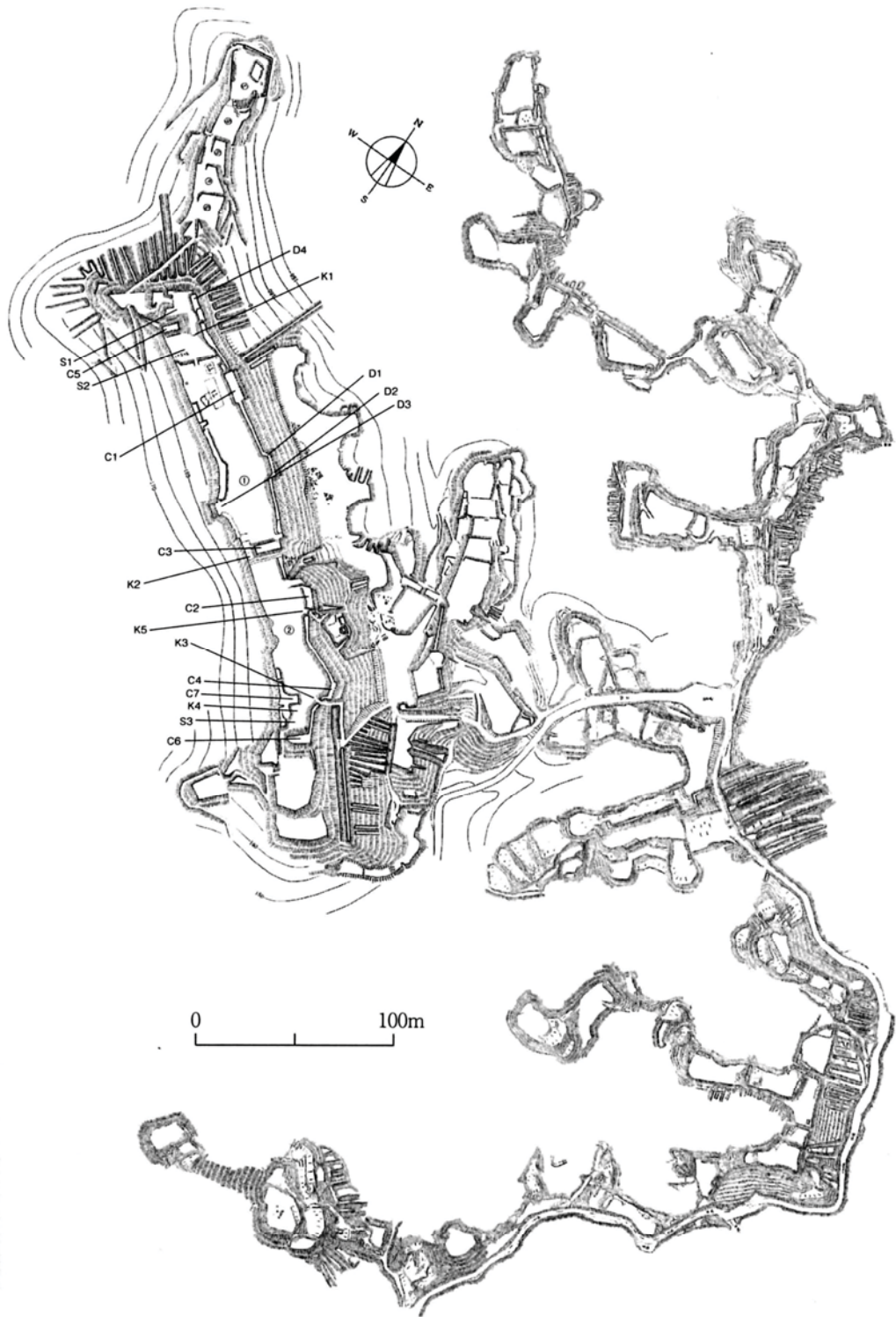


図6. 益富城（嘉麻市）

益富城図（木島孝之作成）

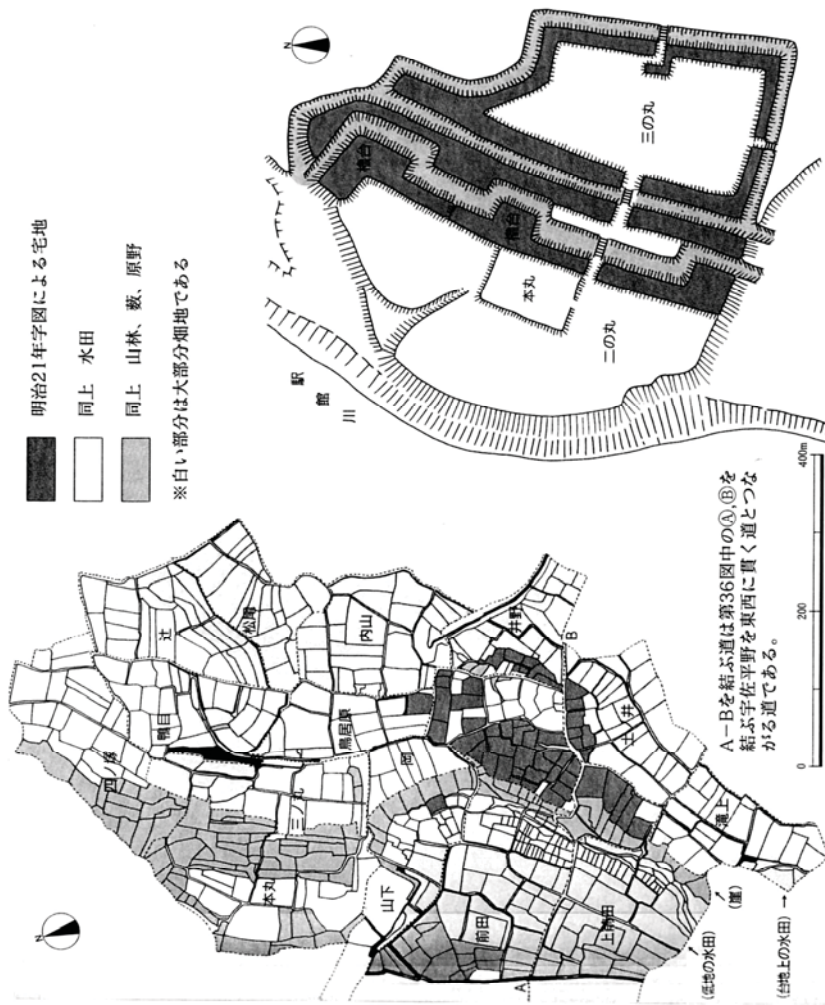


図7. 高森城 (宇佐市)

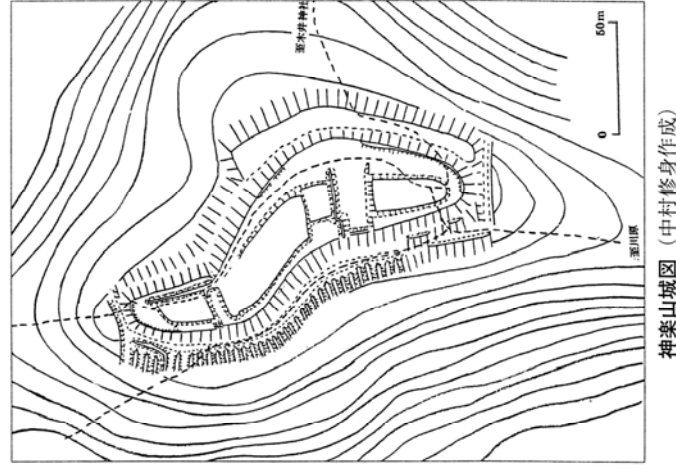


図8. 神楽城 (みやこ町)

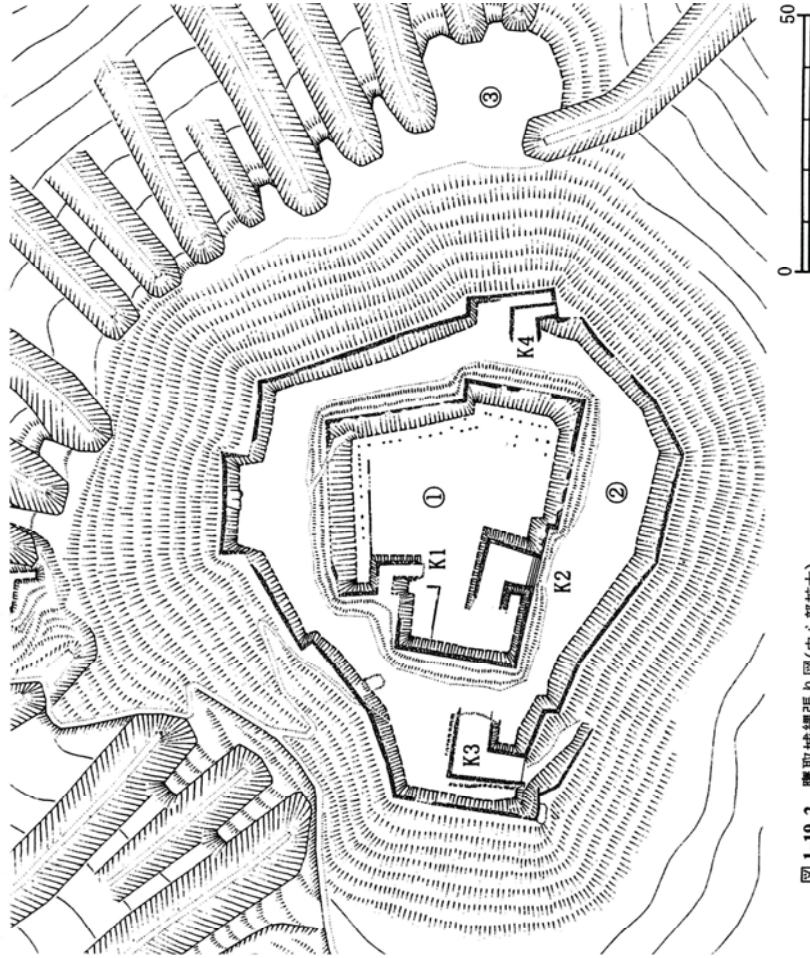


図 1-19-2 鷹取城縄張り図(中心部拡大)

図10. 鷹取城(直方市)

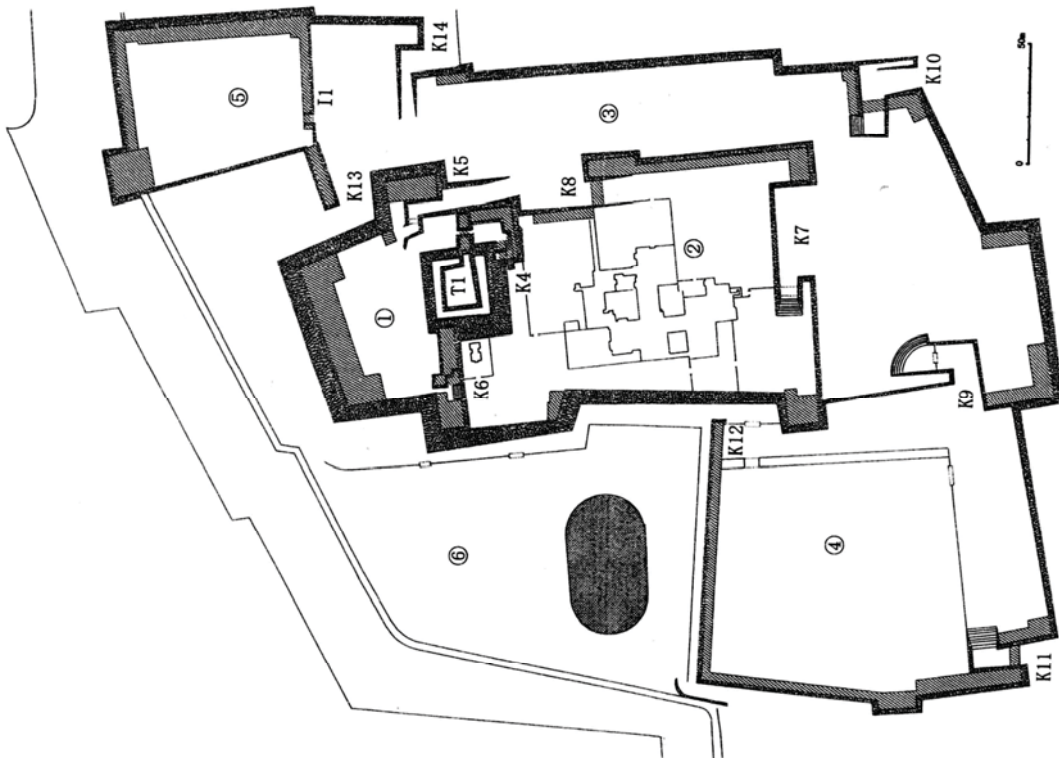


図 1-6 福岡城主郭部の縄張り復原図 西田博作監図を基に作図。

図9. 福岡城(福岡市中央区)

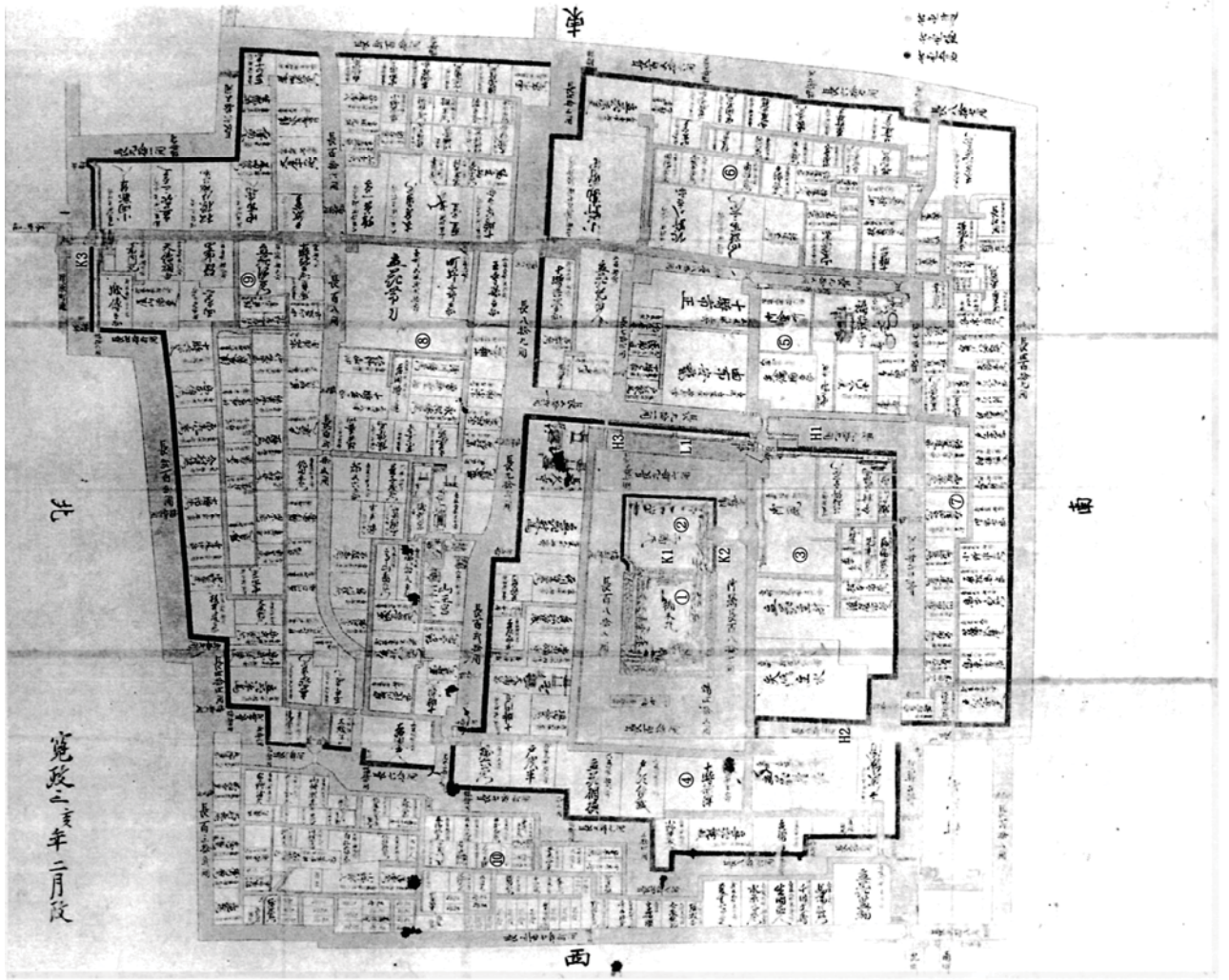


図 3-2 【御城中御絵図】 柳川古文書館蔵。柳川所蔵資料 1-1-1-1。

図二 柳川城(柳川市)

図版一覧

「福岡県の城郭研究の現状と課題」 中村修身氏

- p.5 北九州市 花尾城 (中村修身 作成) ※
- p.5 久留米市 杉ノ城 (中村修身 作成)
- p.6 位置関係図 (中村修身 作成)
- p.6 築上町 通楽城 (中村修身 作成)
- p.6 築城町 本庄城 (中村修身 作成) ※
- p.7 位置関係図 (中村修身 作成)
- p.7 北九州市 市瀬城 (中村修身 作成)
- p.7 北九州市 竹ノ尾城 (中村修身 作成)
- p.8 久留米市 西側 (仮) 草野城 東側 中ノ城 (中村修身 作成)
- p.8 北九州市 浅川城 (中村修身 作成)
- p.8 鞍手町 剣岳城 (中村修身 作成) ※
- p.9 益富城図 (木島孝之 作成) ※
- p.10 行橋市 馬ヶ岳城 (中村修身 作成) ※
- p.11 福岡城 普請御伺絵図
木島孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』[九州大学出版会、2001年]より転載
- p.11 小倉城 (大日本帝国陸地測量部 作成、明治32年発行、「小倉」より) ※

「福岡県の城郭と年代観—近年の城郭研究を踏まえて—」 中西義昌氏

- p.15 「城郭の縄張り用語」
千田嘉博・小島道裕・前川要『城館調査ハンドブック』[新人物往来社、1993年]より転載
- p.16 図1 岩屋城図 (岡寺 良 作成) ※
- p.16 図2 柑子嶽城図 (中西義昌 作成) ※
- p.17 図3 古処山城図 (岡寺 良 作成) ※
- p.17 図4 勝尾城図 (中西義昌 作成)
- p.18 図5 立花山城図 (木島孝之 作成) ※
- p.19 図6 益富城図 (木島孝之 作成) ※
- p.20 図7 高森城図
大分県文化財調査報告書第170輯『大分の中世城館』第四集 (総論編)
[大分県教育委員会、2004年]より転載
- p.20 図8 神楽城図 (中村修身 作成) ※
- p.21 図9 福岡城図 (木島孝之 作成)
木島孝之『城郭の縄張り構造と大名権力』[九州大学出版会、2001年]より転載
- p.21 図10 鷹取城図 (木島孝之 作成)
同上書より転載
- p.22 図11 「御城并御家中御絵図 (柳川城)」 (柳川古文書館蔵)
同上書より転載

※は、福岡県の城郭刊行会編『福岡県の城郭』[銀山書房、2009年]より転載

平成22年7月12日

第44回 福岡県地方史研究協議大会報告

編集兼発行 福岡県立図書館郷土資料課